

熊本保健科学大学保健科学部医学検査学科

古閑 公治*[§] 嶋田 かをる* 杉内 博幸*

はじめに

学校法人銀杏学園 熊本保健科学大学保健科学部医学検査学科における臨床検査技師養成の歴史と特色について概説する。

I. 医学検査学科の沿革と概要

学校法人銀杏学園 熊本保健科学大学は、昭和33年(1958年)に衛生検査技師法が立法化されたことを受けて、昭和34年、当時の財団法人 化学及血清療法研究所(化血研)の公益事業の一環として設立された化血研衛生検査技師養成所を前身とし、厚生省指定の衛生検査技師養成所として全国で最初に認可された6校のうちの1つとして設立された。昭和35年に熊本医学技術専門学校と改称した(写真1)。しかし、衛生検査業務は公衆衛生領域だけでなく、疾病の診断治療および予後判定など医療分野において不可欠なものとなり、業



写真1 熊本医学技術専門学校

務内容が複雑かつ専門化してきた。そこで、衛生検査技師の知識および技能向上が要望され、昭和43年(1968年)に学校法人銀杏学園 銀杏(ぎんきょう)学園短期大学(2年制)、昭和48年に銀杏学園短期大学 衛生技術科(3年制)へと発展した。その後、時代のニーズに応えるため、平成15年(2003年)4月、現在の熊本市北区和泉町(JR西里駅から徒歩2分)に新しく移転し、保健科学部に衛生技術学科(4年制)を設置した熊本保健科学大学(以下、本学)として開学した。平成23年4月、衛生技術学科は医学検査学科へ学科名を変更した。医学検査学科(以下、本学科)では、本学の四綱領である“知識”“技術”“思慮”“仁愛”を基本とし、“臨床”ではなく“医学”とすることで、公衆衛生や健康診断から臨床医学までの広い範囲を包括する豊かな医療人の育成を目指している。現在まで保健科学部には医学検査学科、看護学科およびリハビリテーション学科に理学療法学専攻、生活機能療法学専攻、言語聴覚学専攻の3専攻科を設置した。その他、助産別科やキャリア教育研修センターの認定看護師教育課程脳卒中リハビリテーション看護分野、慢性心不全看護分野に加え、大学院保健科学研究科保健科学専攻(修士課程)を設置することにより、研究活動の向上に寄与している。

本学科における1学年の募集定員は100名である。また、本学全体の総在籍学生数は、1,500名を超えている(写真2)。短大時代を含めた本学卒業生は、九州をはじめ、日本全国における医療・保健・福祉の向上・発展に貢献している。

*保健科学部医学検査学科 [§]hiroko@kumamoto-hsu.ac.jp



写真2 熊本保健科学大学 全景



写真3 病理検査学の実習風景

II. 医学検査学科の教育目標

以下の4項目を教育目標に挙げ、体系的な教育を実践している。

1. 人間の健康、身体の構造、機能、障害をもたらす疾患及び生活環境などの基本的な知識を有する人材を育てる。
2. 今日の科学技術の革新に対応した高度な検査を含めた臨床検査についての専門的な知識と技術を有する人材を育てる。
3. 疾患と検査値に関する知識を学び、的確な臨床支援のできる能力と見識を有する人材を育てる。
4. 食品の安全に関する科学的知識を身につけ、食品衛生管理に携わることのできる人材を育てる。

III. 医学検査学科の学修および 学生生活支援体制

臨床検査学を学ぶ前に、全身の骨、筋肉、中枢神経、内臓などの人間の体の構造(解剖学)、筋肉の収縮の仕組み、呼吸の仕組みなどの人間の体の機能(生理学)などの基礎的な科目を、主に1年次・2年次で学ぶ。さらに、2年次・3年次前期には学内実習を通して、臨床検査の基礎を学修する。2年次・3年次前期の実習内容は臨床生理学、微生物学、病理学、血液学や免疫学などの専門科目である(写真3)。3年次後期の臨地実習では、学術的な基礎固めの時期であると同時に、患者さんや病院スタッフとのコミュニケーションスキル

の向上を目指すために、専門科目の基礎および接遇を念頭においた臨地実習前教育を実施している。4年次では就職委員会ならびに就職支援センターによる就職活動支援や国家試験対策委員会によって学生をサポートしている。学内実習で特記すべき点は、バーチャルスライドシステムおよびオーダーリングシステム(臨床検査システム)を数年前に導入したことである。バーチャルスライドシステムは、Webやネットワークを介して実際に顕微鏡を見ているように再現でき、教育や研修の均質化を図ることができるため、学部生や院生の形態学的教育やオープンキャンパスにも利用している。また、3年次の臨地実習では、学生に対して臨床検査システムの簡単な概要説明は行われているが、実際に触れることがないため検査の流れを理解することが難しい。そこで、本学科では、臨地実習前に、情報システム学、臨床化学検査学、血液検査学などの講義や実習の中に簡略化した臨床検査システムを導入し、実体験を積むことにより臨床検査部門の業務・役割等の理解を高める配慮を行っている。

全学共通の学生支援としては、3つの柱を擁する。①スモールグループ(SG)担任制、②スタディ・サポート(通称スタサ)、③ピア・サポート体制である。まずSG担任制とは、1学年6~10名の学生を教員2名(担任・副担任)が4年次まで学修、学生生活、進路の個別相談をサポートすることである。4年次のSG担任は、就職活動および国家試験対策において就職支援センターや国家試験対策委員会と密に連携し支援している。また、

様々な悩みを抱えた学生に対しては、保健室や学生相談室との連携を強化し、きめ細やかなサポート体制を実施している。次に、スタサとは、共通教育センターが窓口となる学修相談室である。勉強の方法や授業の補習などの相談に携わっている。最後にピア・サポート体制とは、学生相談室が主導し、研修を受けた在学生のサポーターが後輩学生からの修学に関する質問や学生生活全般の相談に応じる有償ボランティア活動のことである。サポーターは、通常の相談活動以外にも新入生オリエンテーション時のグループワークにおけるファシリテーター役やオープンキャンパス時の「在学生との交流コーナー」担当など幅広く活動している。

IV. すべての学生にわかりやすい授業 ー医学検査学科の取り組みを全学へー

本学では、開学後初めて重度聴覚障害学生が医学検査学科へ入学したことを契機として、平成23年(2011年)4月に修学上特別な配慮を必要とする学生を対象とした学長直属の『障害学生支援室』を設置した。平成28年5月1日現在、障害学生修学支援等依頼書が提出されている支援対象学生は、発達障害支援法で規定される学生や病弱・虚弱の学生を含めて保健科学部全体で11名(本学科:2名)である。

この聴覚障害学生へ本学科が支援室とともに実施した授業支援の取り組みは、FD推進委員会と連携を図りながら全学的活動に広げ、学生全体がこ

の取り組みの成果を享受できる形へと繋げていった。すなわち、教員が多様化する学生への支援者としての姿勢や教育スキルを身につけ、障害のある学生を含めたすべての学生にわかりやすい授業を実現して、学生たちが自ら有する潜在的な能力を最大限に発揮できるとともに、障害のある学生との共生が周りの学生を育てる環境への取り組みへと発展している。

おわりに

本学科は、設立から今年で53年という、国内で最も歴史のある臨床検査技師養成施設である。教育・研究・社会活動における本学科の伝統を重んじることは勿論のこと、多彩なカリキュラムと最新の設備を充実させることにより、全国的にもトップレベルの施設と最先端の検査機器を活用した学内実習であると自負している。また、確かな専門力と豊かな人間力を涵養するために、幅広い専門知識や最先端の高度な技術を習得できるカリキュラムを備えているばかりでなく、臨床現場で対象となる「ヒト(患者さん)」との関わりについて深く理解できる教養科目も充実させている。さらに、学生の時からチーム医療を意識付けるために、学内実習・演習でチーム医療を意識した授業を行っている。

我々は、今後も医療職者として求められる、協調性と柔軟性、高度な専門知識を兼ね備え、業務遂行ができる人材育成を目指していきたい。